

在日ラオス系住民の定住と教育に関する研究

乾 美紀 (日本学術振興会特別研究員)

1. 問題の所在

一般に、インドシナ難民の中でもラオス系住民は、ベトナム系住民と比較すると、教育に対する意識が低く、学校や社会への適応に時間がかかり、学習の達成度も低いと報告されている。発表者の米国・ウィスコンシン州での経験 (1992年-1995年) でも、ラオスからの難民 (ラオ・モン) はベトナム難民と比較して、学習の達成度が低く、適応に時間がかかっていた。

2. 研究の目的

先行研究が指摘するように、ラオス系住民の適応が遅く学習の達成度が低いことは、在日ラオス系住民にも該当するであろうか。該当するとすれば、その理由と何か。これまでマイノリティの学業不振の理由は、「遺伝説」、「文化原因説」、「学校原因説」などの形で説明されてきたが、実際に定住に関わった人々の見解はいかなるものか。本研究では、特に定住者の学習の達成度や本人の学習経験についてインタビュー調査を行うことにより明らかにすることを目的とする。

3. 研究の手法：

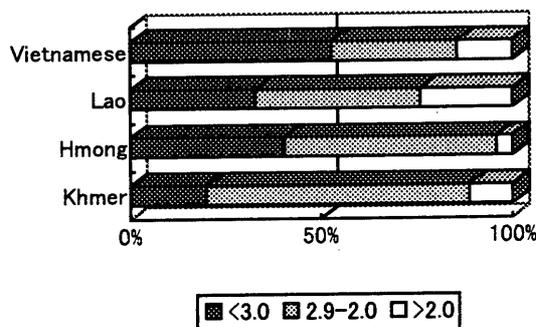
かつて難民定住促進センターが設置されていたため、ベトナム系及びラオス系住民が居住している兵庫県 (姫路市周辺) をフィールドとし、学校関係者、元定住促進センター職員、日本語教員、定住者の雇用主などの非定住者及び、定住者、定住者の子どもにインタビューを行う。

4. 先行研究

これまで、インドシナ難民の学習の達成度や適応に関して、以下のような研究がなされている。

まず Rambant (1989) が、サンディエゴ定住のインドシナ難民の高校生の成績 (GPA) を調査したところ、図1に示すとおりベトナム系の生徒の成績が一番高く、彼らのうちの半数以上 (53.4%) が GPA3.0 以上を取っていることが明らかになった。図1によると、ラオス出身のラオやモンの生徒、そしてカンボジア出身の生徒の GPA は、ベトナム系生徒のそれよりも低いことが分かる。

図1. インドシナ難民生徒の GPA
(1986-1987) N=239



(Hanes ed. 1989, p.169 より発表者作成)

一方、日本定住のインドシナ難民に関して行われた調査結果には、「ラオスの定住者は、日本語の理解に乏しい」、「進学者が少ない」ことが特徴づけられている (難民事業本部 1996, p.17, p.185)。この理由には、どのような背景が存在するのだろうか。近年行われた東京大学ニューカマー研究会による調査では、ラオス系住民の学校への適応が遅い理由は、親の教育資源が乏しく、日本人または同国人とのネットワークが弱いためであると結論づけている (志水・清水編 2001, p.185)。

次に Lang は、アメリカに住むラオス系住民にインタビュー調査を行っているが、その調査結果を引用・翻訳すれば、「学校のプログラムでは、ベトナム生徒が優先されて、ラオスやカンボジアの生徒の文化的・心理的なニーズは無視された。」「ラオスの生徒は常に優秀なベトナムの生徒と競争せねばならなかった。」 (Lang 1990, p.197) という事実がある。ここには、難民側だけではなく、学校側にも問題があった様子を伺うことができる。

5. 本研究の位置づけと分析方法

先行研究では、ラオス系生徒の適応の困難性や成績の低さを指摘するに留まっており、その具体性や理由についてはほとんど言及されていない。このため、本研究では、ラオス系住民の定住に関わった人々を調査対象とし、総括的な見解を得る。

調査結果の分析方法として、インタビュー内容をテープ起こしし、学習達成の低さや学習経験について言及したキーワードを要因とみなす。その上で、要因間の関係を考察する(図2参照)

6. 調査結果

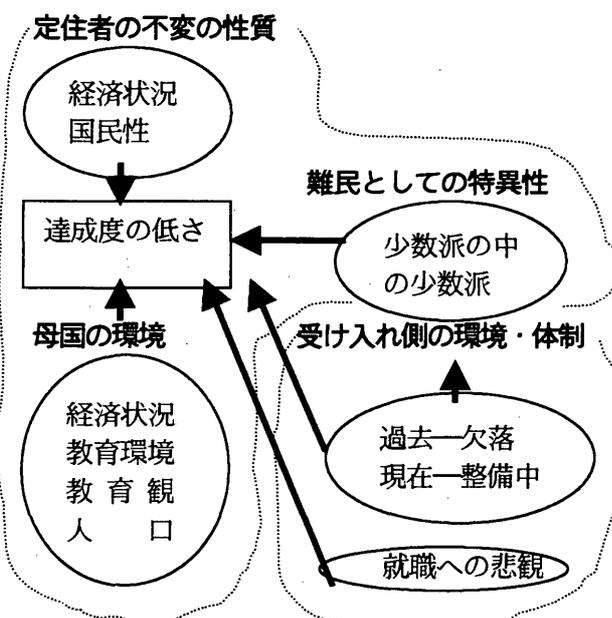
インタビューの抜粋：<1. 雇用主のコメント>

日本語やけどね、片言だけで字が読めん人が多いわ。ベトナムの方の方が早いんじゃないか？(中略) ラオスの方もはっきり話せる方多いです。ベトナムの方のほうが熱心みたいやね。理由ねえ、やっぱしどないいうんか。ベトナムとラオスいうたら環境が全然違うからね。ラオスはどないいうんか、**世界で一番貧しい国**やからね。**教育なんてほとんどなかった**んちゃうかね。今雇っているのは、40代ですね。そうやね、10年いたって日本語でもなんぼ教えても分からんらしいからね。

<2. 定住者の子ども(2世)のコメント>

私らに特別な教育って？**なかったですね。ラオスは少なかった**からね。ベトナムの子は、ベトナムの生春巻きつくったり歌を歌ったりする教室があるみたい。<中略>特に私の頃は、先生普通に授業してて、「この部分分かったか？」って聞くけどね。だから、先生も私もそうやけど、**特別に何かしてもらっているのなかった**。普通に授業受けてって感じやった。私はね、どうしても「隠そう」というところがあったからね。そう、**少ない**から。今みたいなオープンな時代やったらね、文化の交流もできるんやけど、控えめやったからね。

図2. ラオス系住民の学習達成度が低い理由



7. まとめと考察

インタビューを行った結果、先行研究が指摘したとおり、非定住者からは、ラオス系の住民の学習達成度は、ベトナム系住民よりも低い傾向があると指摘されることが多かった。その要因については、非定住者と定住者で回答が二分された。

まず、非定住者からは、その要因をラオス系住民の経済状況の悪さやのんびりして争いごとを好まない国民性など、「定住者を取り巻く不変の性質」に言及する傾向があった。また、「母国・ラオスでの環境」に触れ、ベトナムと比較して人口が少なく静かな環境のため、競争に慣れていないこと、ラオスでは教育が整備されていないために、教育に対する意識が低いことなどと指摘した。すなわち非定住者からは、定住者の文化や生活スタイルに原因を帰する「文化原因説」に近い指摘がなされたのである。

一方、定住者自身(一部難民支援者を含む)は、学校が、ベトナム系と比較するとごく少数派だったラオス系子弟に対して特別な配慮を施さなかったことや現在の支援体制が未熟であることが影響していると指摘した。このことは、受け入れ側の環境や体制にも問題があることを指摘した「学校原因説」に当てはまると言える。

また、勉強をしても就職がないという理由から進学しない者が多いことも明らかになった。実際に2世には、就職活動中や就職先で差別的な待遇を受けることが原因で、就業しようとしにくいケースが多い(同じ傾向がベトナム系定住者にも見られる)。このようなジレンマは、オグブが唱えた「社会構造説」に該当すると言えるだろう。

これまでラオス系住民は、教育に対する意識が低いと言われてきたが、定住者へのインタビューの結果、自分たちが教育を受けていない分、子どもへの教育に対して高い期待を持っている傾向が見られた。そのため、非定住者側は「学校原因説」や「社会構造説」に関係する諸要因を改善していくことを試み、定住者にとって学習や就労に対するインセンティブが働く環境を作り上げることが必要であると言える。

ラオス系住民の2世が在学する学校の教師によると、現在までベトナム系の2世に対して行ってきた支援を、少数派のラオス系の生徒にも広げていく方針を現在思案中ということである。このような学校の新しい動きによって、マイノリティの中のマイノリティであるラオス系住民生徒の学習達成の向上に貢献すると考えられる。

<引用文献は当日資料において提示>